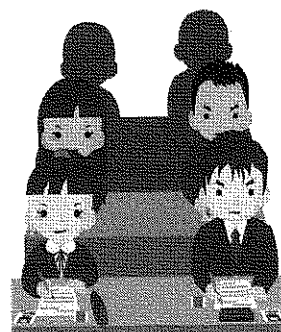


	Never Give Up Act on my own Change myself Knowledge is money	Neo 名寄高校2期生(通算79期生) 29号(進路特別号) 令和7年 2月14日 進路担当: 佐川 大樹
---	---	--

☆出願状況から見えること

現在、3年生は国公立の2次試験に向けて頑張っているところですが、先週、国公立大学の最終確定出願状況が新聞発表されました。皆さんもどこかで目にすることはあるかと思いますが、数字の見方をきちんと理解して、おかしい勘違いをしないように注意してもらいたと思います。

国公立大学の受験は基本2回(最大で3回)チャンスがあります。前期と後期(＋中期)です(ただし中期や後期を実施しない大学もあります)。募集定員はだいたい前期が8割、後期が2割くらいです。下に例として旭川医科大学の出願状況(確定版)を載せましたが、やはり前期の方に定員が偏っています。普通、国公立に出願する場合、前期と後期の両方を受験しますので、後期の倍率が高くなります。今年の最高倍率は35倍でした(福山市立大・後)。



2025年度の旭川医科大学の出願状況

日程	学部	学科	募集 人員	志願 者数	倍率	昨年 倍率
前期	医	医	40	132	3.3	(5.6)
		看護	40	88	2.2	(1.6)
	(前期計)		80	220	2.8	(3.6)
後期	医	医	8	190	23.8	(37.1)
		看護	10	107	10.7	(11.3)
	(後期計)		18	297	16.5	(22.8)
【大学計】			98	517	5.3	(7.1)

それを考えると、国公立大学(特に後期)はさぞ難しいというイメージがありますが、そこに数字のからくりがあります。まず、表にある倍率は、単純に志願者数を募集人員で割った数字で「志願倍率」とか「名目倍率」といいます。しかし、実際は試験当日に欠席する人が出てきます。特に後期の場合は後述の理由で、欠席者が大量に出ます(受験者がポツン、ポツンというイメージです)。

国公立の受験の場合、前期で合格すれば、基本その大学に入学手続きを行います。前期で合格して後期を受けるというパターンはありません。なぜならば、後期を受ける前に前期の入学手続きが締め切られるからです。だから、**後期試験は前期で不合格になった受験生達の敗者復活戦**になります。当然、前期で合格した人は後期試験を欠席します。欠席しても受験料が返ってくることはありませんが、受験機会を確保するために、前期と後期の両方を出願するのが普通です。だから、**後期では欠席者が大量に出る**のです。

また、前期で合格しても入学手続きを取らないというケースがあります。第1志望が私立大学で合格した場合などが考えられます。この場合、大学側は前期の欠員分を、追加合格で出したり、あるいは後期の定員を増やしたりして穴埋めします（状況によっては後期についても追加合格を出す場合があります）。そうすると、**本当に必要になってくる数字は、受験者数を合格者数で割ったもの**です。これを「実質倍率」とか「最終倍率」といいます。

2024年度の旭川医科大学の最終結果

日程		学部	学科	募集 人員	志願 者数	志願 倍率	合格 者数	受験 者数	実質 倍率
前期		医	医	40	225	(5.6)	42	159	(3.8)
			看護	40	62	(1.6)	40	60	(1.5)
		(前期計)		80	287	(3.6)	82	219	(2.7)
後期		医	医	8	297	(37.1)	8	24	(3.0)
			看護	10	113	(11.3)	11	23	(2.1)
		(後期計)		18	410	(22.8)	19	47	(2.5)
		【大学計】		98	697	(7.1)	101	266	(2.6)

上の表は、昨年の旭川医科大学の受験状況です。特に後期試験で志願者数に対して受験者数が大幅に減っている（欠席者が多い）ことがわかります。それに伴い実質倍率も志願倍率に比べて大きく下がっていることもわかります。このように、報道発表される倍率については、まったく無視しても構わないくらいどうでもいい数字と言えます。

それよりも、過去問を解いてみて**その年の合格最低点をクリアできるかの方がはるかに重要**です。合格最低点を大きく下回るようであれば、どんなに倍率が低くても合格なんてできません。倍率なんて気にせずに、その大学の入試問題を解ける能力を養うことに専念することが賢い受験生といえます。